

マーラーの歌曲集「さすらう若人の歌」Vol. IV —歌手とピアニストの為の演奏と解釈—

野々垣 文 成

1 はじめに

マーラーの歌曲集「さすらう若人の歌」の歌手とピアニストの為の演奏と解釈について2011年より取り上げている。歌手とピアニストはあくまで演奏自体で評価されることが通常であり、演奏の内容を文字化することは稀である。しかし演奏家たちの演奏に対する参考の一端を担えればとの思いであえて執筆している。今回はこの歌曲集の最終曲第4曲目の演奏と解釈を論じる。

4. 「二つの青い目が」

これまで第1曲の彼女が他の男との婚礼をあげることに始まり、第2曲目では朝の野辺を歩き野原の美しさを明るく爽快に歌い出すが曲末では悲しげな自分への幸福への懐疑に歌い終えている。第3曲では恋人を忘れることが出来ない苦しみが一気に噴き出し、感情の方向を失ったやるせない思いを荒れ狂う嵐のごとく歌い切り憔悴していく若者の思いを激情的に歌っている。最終曲は若者の心も癒えたように思える部分も見られるが若者の苦悩は完全には拭い去れないままこの歌曲集を閉じている。歌詞の内容の第1節は“いとしい人の青い目は僕を広い世の中に送り出した。今はなにより愛する場所を離れなければならない。おお青い瞳よ、なぜに僕を見つめるのか? 悩みと嘆きは永遠に僕のものだ”と歌っている。拍子は4分の4拍子である。この最終曲のテンポ指示はAlla Marcia(行進曲のように)となっている。行進曲は元来周知されている4分の2拍子である。しかしマーラーの自筆稿では「葬送行進曲のテンポで」となっていたらしい。葬送風がこの拍子設定の大きな理由であろう。このテンポ設定から第4曲目の作曲者の意図がよくうかがえる。マーラーの交響曲第5番をはじめ多くの作品のテンポ指示に用いられている「重い葬列のように」という感じを出すのが肝心であろう。一般的に行進曲のテンポではない。行進曲にも行進する内容によって

種類が違うことを演奏者は理解していないといけない。元気澁刺な行軍行進曲、大敗行進曲、日本には存在しない葬送行進曲、学校で使う運動会の行進曲等が存在している。この曲はテンポ指示のほか演奏指示が記されている。作曲者の意図で“**Durchaus mit geheimnisvoll schwermütigem Ausdruck (nicht schleppen)**”「完全にひそやかに重く疲れ切った感情で(しかし引きずらない)」とかなり細かい指示をしている。前述しているAlla Marciaの一般的なテンポ表示ではないことは演奏家はすぐに理解できるであろう。しかしこの感覚的な内的指示をいかに演奏で表現するかは演奏家たちの感性と西欧文化に対する造詣が左右するであろう。演奏はただ譜面上の再現芸術でないことは明白である。西洋人の感情、感覚、文化、物の感じ方等日本だけの研鑽だけでは解決しないことが多い。実際には葬送の内容な歌ではないのであるから扱いはなお難しい。若者は葬送の列に参加しているのではなく第1曲目から始まっている彼の心に対する葬送を表現している。では実際に楽曲を論じていく。第1曲から第3曲までは前奏部分としてはあまり長くはないがかなり上手に各楽曲の内容を暗示している。しかし第4曲には前奏がない。この前奏がないことがこの第4曲目を際立たせているといっても過言ではない。第3曲目の最後部分の俗にいうマーラーの「死の象徴」と言われている作曲技法を相互に生かしているのである。この心の死から第4曲は直接歌い始めている。決して第3曲目からの続きではない事は歌手もピアニストも理解しておかなければならない。最初の歌い始めはマーラーの第5交響曲等で使われている重い葬列の足取りで歌い出されている。演奏者は第3曲時とは気持ちも雰囲気も状況もすべて入れ替えなければならない。前奏がないので初心者にとってはかなりの難解さがある。しかしベテランの域に入っている演奏者は前奏がなく直接歌い出すことにためらいは見せず雰囲気を

しっかりと持ち、歌い出すであろう。曲は一見有節形式で始まるのかという感を聴衆に感じさせるが実際はかなり自由に近代歌曲の特徴をしっかりと携えて作曲されている。第14小節までの第1節はメロディー部分とピアノパートが同じ旋律をなぞっている。歌声部のフレーズの区切りにおいてはピアノパートが支え音楽の旋律部分の弛緩を防いでいる。これは作為的ではなくかなり自然な形であるので聴衆は気づくことはないであろう。(第2, 4, 7小節) 又、第1小節目からのピアノパートの左の第1拍目のバスの音は葬式のドラの音の模倣である。ピアニストは静かによく地に響く様に脱力した力で鳴らすことが肝要である。このバスの響きが第1節全体(第16小節)まで支配している。第1節の音楽の基調である。第8, 10, 14小節は4分の5拍子である。この不規則な拍子の混入は歌詞の内的表現を音楽的表現の上に更に気持ちをもせ訴えかけている。それはこれらの各小節の第4拍目の休符の問題である。この休符は作曲技法上ないほうがずっと拍子的にも音楽の流れ的にも自然さを感じる。しかしこの第4拍目の休符が介在していることをどれだけの聴衆が不自然さを感じるであろうか。しかしこの第4拍目の休符があることで聴衆の胸の内の感情を深くえぐり出す効果をしっかりと上げている。マーラーの偉大さもこの些細な1拍が如実に表わしている。ではメロディー部分を論じてみよう。歌い出しはファルセット(裏声)を(声種や声質によってであるが)80%位混ぜるとよいであろう。何度も声のテクニックについては述べているのだが、このファルセットと地声の割合を自由にコントロールできることはドイツ歌曲を歌う最も基本的なテクニックでこのテクニック不足の歌手はドイツ歌曲をうまく操れなく表現の幅に限界があり、又、音楽の色がつかない単色なつまらないものになっていく。激しい内容を多くの胸声を使って歌う(約30%のファルセットと70%の胸声のミックス)第3曲の曲想との対比を出さなければならない。最初の歌い出しの節(第9小節目も)に8分休符があるのだが(○印)これは単純な休符ではない。歌詞はDie zwei blauen Augen von meinem Schatz, (僕のいとしい人の二つの青い目)と歌っているのだが、この部分の一つの文節であるの

で、途中で切って息つきをすることは厳禁である。マーラーはこの8分休符を若者の気持ちの滞りを表現している部分であると解釈が出来る。第9小節目も同様の解釈である。第9小節目の歌詞はO Augen blau warum habt ihr mich angeblickt? (青い目よ、どうして僕を見ていたの?)と歌われている。音型、詩節の構造は異なっているのだが、内容的には同種類の解釈とみなしてよい。歌手は曲頭と同じ扱いで演奏するべきであろう。歌手にとってこの曲の最大の難しい個所の一つとして第7小節目が挙げられる。第6小節目にはディクレッシェンドが掛かり最高音のAs(♭ラ)に向かってさらに弱くなっている。歌手の宿命的な性格から高音になって行くと大声で叫びたくなるのが通常である。しかしマーラーはこのテクニク的に難しい個所を歌詞の内容からPP(ごく弱く)に設定している。歌詞の内容はvom allerliebsten Platz “すべての愛する場所”と歌われている。歌詞の前後の内容によっては喜びを持ってはつらつと歌うよう設定されることも多い。しかしこの最終曲においては第1曲からの流れでこの愛する場所はいい思い出とはつながないことがよくわかる。これらの理由によってマーラーはppに設定している。第10小節目の第5拍目からのメロディーは第2小節目の3拍目からのメロディーと同じフレーズをたどるかのようになっている。若者の心の重荷を感じ歌詞の長さが同じであるので音楽を引きずって自由に拡大していると思われる。第12, 13小節目に付いているΛ(アクセント)は若者の引きずっている苦悩を強調している。もちろん歌詞の単語の強調も兼ねている。Leid(苦悩)とund(そして)は次に来るGrämen(欺き)をより強調するために単語(Grämen)そのものに掛けず、単語の内容をより強調している。LeidとGrämenとを並列におけば音楽表現は平凡なものになってしまう。Leidの表現の重みは音量的にはディクレッシェンドとなっており歌詞の強調である。undの3連符には各々の音符にアクセントがついている。この接続詞の強調はGrämenに強く掛かっている。Grämenの表現方法はundの強い表現とは対照に放心状態としての表現である。この対照的な作曲法は近代歌曲以降に特にあらわれている手法である。ゆえに第13, 14小節が生きて来

るのである。第14、15、小節の間奏は第4曲全体を支配している基本メロディーであり若者の根底にある重く暗い心の表れである。第17小節から若者は実際に歩き出している。第35小節目まで歩き続けている。ピアノパートの左手が若者の具体的な歩行を表現している。音型は規則的であり、音は第1音、第5音の繰り返しである。(DesとAs)これははっきり通奏低音的な響きと役割を果たしている。この左手の動きは若者の無味的な歩みを表現している。足を引きずり重苦しい思いを抱きながらの行進的な歩行である。深く地に響くような深い音で演奏したい。歌詞の内容は“僕は静かな夜、暗い荒野に旅立つ。誰も僕にさよならを言うものもなく、僕の友の愛と苦悩と共に”と歌っている。メロディー線はich bin ausgegangen(僕は旅立つ)の部分は長調である。(若者は外出することに気持ちを切りかえ静かな夜に)の部分からは短調に転調している。現実的には明るい陽光の下ではない。die dunkle Heide(暗い荒野)となっている。若者の心の根源的な部分はまったく変化していない事の表れである。若者の心の揺れと同様に長調、短調を繰り返している。第29小節目からは“誰も僕にさよならを言ってくれない”との内容にはっきりと音で表現している。「Ade」“さようなら”の単語を強く表現するためにメロディー線の長調部分を半音階的音階を使い若者の後ろ髪をひかれる心理的状态を表現している。第27、28小節目のAdeには前述のAdeにはなかったアクセントがついている。このアクセントの意味は歌詞の内容からの解釈とは違い自己への思いを強く表現している。ピアノパートの第30小節目からの3小節に出現している内声のトリルは葬式のドラの音を模倣しているのである。このドラの響きはあくまで鈍く響かせなければならない。このトリルのみが目立つ演奏は避けなければならない。あくまで現実の音ではなく心の中に響く幻聴的、脅迫的な音であろう。その為に作曲者はあえて内声にこの部分を挿入しているのであろう。作曲者はあえて第32小節目にohne Nachschlage(響きを抑えて)と表示している。第34小節目にはmorendo(消え入るように)と指示があるように音楽にritをかけ自然に衰退させていく。第40小節の第4拍目からは音楽が再び盛り上がるの兆し

が感じられる。第39小節目、左ピアノパートの8分音符が音楽、あえて言うなら若者の心の変化につながるきっかけとなる個所である。この8分音符はあまり目立たないようにテヌートを付けて演奏する。それをきっかけとして短調から長調に音楽が移行していくのである。第40小節からは音楽は穏やかに流れだす。この部分から最終節に入る。ピアノパートとしては第37小節目の変ニ長調の主音のシンコペーションから始まっている。第37、38小節の部分は若者の心に過去の自分との決別と将来への希望の予感である。若者の心の安定を安定した主音のみで表現しているのは明白である。第39小節の右手のピアノパートは3連音符に変化しているが左手は前小節からのシンコペーションを継続させている。若者の心の高揚の表れを声部を使わずに表現しているところはさすがに大作曲家のマーラーの手法と言える。第41小節からの歌詞の内容は“道端に一本の菩提樹が立っている。僕は初めて眠りの中に憩った。菩提樹の下で！僕の上に菩提樹の花びらを雪のように降らせる。僕は人生の苦悩を忘れた。愛も苦悩も世界、夢もすべて良くなるように、全てすべて良くなるように！”と歌っている。音楽の流れは穏やかで若者の愛への再生を聴衆は感じるであろう。第41小節にはLeise, biss zum Schluss(最後まで弱く)と記されている。歌手は曲末までメツァ・ヴォーチェ(頭声区の半分の声で)歌い通さなければならない。ドイツ歌曲を専門とする歌手の第1の条件としてメツァ・ヴォーチェのテクニックを持っていなければならない。音楽の幅広い表現と音色の変化は切っても切り離せない所以である。第41小節の歌い出しは明るく軽い80%位のファルセットで歌い出さないと第56小節の(前述の第7小節の個所と類似している。)ハイテクニックの個所は乗り越えられないであろう。鮮明な明るく軽い声で歌うことが肝要である。ピアノパートの左手は第2、3節と同様に通奏低音的な動きである。常に同じ響きと動きの中に右手の旋律を載せていくのはある意味のピアニストとしての感性と力量を求められる。第45、49、50小節のピアノパートは間奏としての感じ方ではなくメロディーと一体化していると考えべきである。という事は歌声部がピアノパートをなぞっていると考えるほうが

正しい。第52～59小節の間は音の変化が激しく不安定な響きになっている。このような部分はこの第4曲目においてはかなり見え隠れしているがこの第4節に関しては軽く明るく演奏すしなければならない。特に日本人の歌手たちは音楽の内容の優先より歌手としての感覚や自然の感性を重視する傾向にある。その様な傾向の演奏に絶対なってはならない。若者の現実¹は菩提樹の並木の下を歩いていけば菩提樹の花びらが雪のように僕の上に振ってくる。昔の愛の痛みは忘れこれからすべて良い方向になると淡い期待を細く歌い掛けているのである。音楽は萎えてはならない。あくまで前向きに歩いていく若者を表現したい。第58小節目からは音楽（メロディー）は簡素化され音型は沈んでいく。しかし前述しているように再び歌手が同じ間違いをしてはならない。ピアノパートには第57小節目にはpoco rit（少しゆっしりと）、第61小節にはmorendo（ゆっくりと消え入るように）

と記されている。この曲末は落ち込んだ若者の心を表現しているわけでは決してない。シューベルト作曲「美しき水車小屋の娘」の第20曲『小川の子守歌』と同形式の部分である。若者に対するゆりかごである。若者はまどろみゆりかごに揺られている。歌詞は全ての愛、苦悩、全ての世界、夢、と歌って曲を閉じている。小宇宙的な感を聴衆が感じるように演奏しなければならない。第64、65小節の左のピアノパートはかすか遠いところで葬式のドラが響いている様子²を表現している。若者の幻聴であろうか。第66、67小節のピアノパートは全て拭い去れない若者の過去の苦悩が脳裏に浮かんでいるのであろう。この「さすらう若人の歌」の“さうらう”という意味は現実的にさすらうのではなく若者の心の揺れである。歌手とピアニストは曲の真髓をよく理解して聴衆の心に訴える演奏を切に望む。

No. 4.

Alla Marcia 1

Durchaus mit geheimnisvoll schwermütigem Ausdruck (nicht schleppen)

pp

Voice

Die zwei blau - en Au - gen ○ von mei - nem Schatz, die ha - ben
 When your eyes are shi - ning I leave your side I know you

Pianoforte

pp

3

mich in die wei - te Welt ge - schickt. Da - - musst' ich Ab - schied
 ne'er can be mine though you are near and - I must say fare -

6

pp *espress.*

neh - men vom al - ler - lieb - sten Platz! O - Au - gen blau warum habr
 well - now to all - I hold most dear! O - eyes of blue that I must

10

ihr mich an - ge - blickt! ? Nun hab' ich e - wig Leid
nev - er see a - gain. My heart is filled with grief

13

und Grä - men!
grief and pain

17

p Ich bin aus - ge - gan - gen in stil - ler Nacht, in
I have wan - dered lone - ly by night and day, no
immer mit Ped. pp

20

stil - ler Nacht wohl ü - - ber die dunk - le Hei - -
sound on moor or hill 'Mid the pur - ple heath - -

23 **Semplice, non sentimentale**

de; hat mir Nie - mand A - de ge - sagt A -
 - er No one came to my side to say fare -

27

de! A - de! A - de! Mein Ge - sell' war —
 well! Fare - well! Fare - well! Grief must be my —

30

Lieb' und Lei - de!
 com - rade ev - er!

(ohne Nachschläge)
morendo

34

39

Leise, bis zum Schluss

Auf der Stra - sse steht ein
By the way - side stands a

sempre pp

42

Lin - den - baum, da hab' ich zum er - sten Mal im Schlaf ge - ruht!
lin - den tree and in its sweet shade in sleep I long have lain.

pp

ppp

45

Un - ter dem Lin - den - baum! Der hat sei - ne Blü - ten ü - ber
Un - der the lin - den tree. Where blos - soms fell gent - ly down and

48

mich ge - schneit da
cov - ered me. And

51

wusst' ich nicht, wie das Le - ben tut war_ Al - les, Al - les wie - der
I for - got all my bit - ter pain for_ all was well with_ me a -

55

gut! Ach, Al - les wie - der_ gut! Al - les!
gain, Ah_ all was well a - gain! O - ver!

poco rit.

59

Al - les! Lieb' und Leid, und Welt, und
O - ver! Gone were love and grief and

morendo

63

Traum!
dreams.

ppp *ppp*

67

The Mahler Song Cycles“EinsFahrendenGesellen”Vol.4 —Performance and Interpretation for the Singer and Pianist—

Nonogaki, Fumishige*

声楽の分野では演奏が全てである。その演奏の助けとして歌手とピアニストの為の演奏法の解釈、分析が必要であり重要となってくる。現在、声楽の分野ではそのような文献がまだ不十分である。特にその中でもドイツ歌曲の分野では世界で最も優れている詩人の作品に才能ある作曲家が曲をつけていることでも知られている。筆者自身ドイツ歌曲専門の歌手であるため、ドイツ語圏の最高の芸術作品であるドイツ歌曲の演奏法と解釈に注目している。

キーワード：グスタフ・マーラー, さすらう若人の歌, 歌曲集